

Xymena Kurowska and Berit Bliesemann de Guevara (2020) "Interpretive Approaches in Political Science and International Relations", in Luigi Curini, Robert Franzese eds, *The Sage Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations*, Los Angeles, Sage, pp. 1133-1147.

Xymena Kurowska and Berit Bliesemann de Guevara (2020) 「政治学・国際関係論における解釈的アプローチ」 pp. 1133-1147.

➤ 紹介文

本稿は、政治学・国際関係論に関する定性的・定量的方法論を幅広くカバーした最新の著作、「SAGE Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations」に収められた論文である。当該論文では、政治学・国際関係論における解釈的アプローチの位置付けと研究上の特徴について検討を行っている。

➤ 概要

- 近年、政治学／国際関係論(以下：PS&IR と表記)における解釈的アプローチについて関心が高まっている (Bevir 2000; Schwartz-Shea & Yanow 2012; Lynch 2014; Yanow & SchwartzShea 2014; Bevir & Rhodes 2016; Rhodes 2017; Heinel & Münch 2018; Bevir & Phillips 2019; Steele et al.)。しかし、PS&IR における解釈的アプローチの立場は、依然として曖昧なままとなっている。
- 上記の課題に対して、本研究は PS&IR における解釈的研究の特徴や研究目的、分析手法について明確化することを目的とする。
- 以下ではまず、PS&IR における解釈主義の目的について実証主義的研究との対比から検討を行う。次に、解釈的研究の特徴を構成する 4 つの要素 (多義的な意味の探求、特定の文脈における概念の分析的使用、帰納的な探求の論理、再帰性) について順に検討を行う。最後に、解釈的研究の実践について具体的な研究例とともに紹介する。

➤ 実証主義的研究と解釈主義的研究の相違(1212-1215 頁)

- 解釈主義者と実証主義者の違いとは、研究方法そのものではなく、主に存在論と認識論の相違に由来している。

- ・ 実証主義者は哲学的な二元論者であり、研究者自身を観察対象の世界とは別の存在として位置づける。そして、研究対象の文脈から独立した標準的な手続きによって対象を研究することができると思う。
 - ・ 解釈主義者は、特定の文脈から独立することを否定するという意味での哲学的一元論者である。この立場では「真理の対応説」、すなわちある命題の真偽と現実の状況との間に明確な対応関係を確立できるという考え方を否定する。
- 解釈主義的研究の目的
 - ・ 解釈主義的研究においては、中立的あるいは法則的とされる概念の規範的背景を示すことが中心的な役割となる
 - ◇ Oren (1995) は、民主主義国は他の民主主義国に対して戦争をしないという国際関係論の法則が、いかに歴史的な価値・規範を含んでいたか明らかにした。
 - ◇ Tannenwald (1999) は核兵器の不使用について、時間経過に伴う核兵器を容認できないという規範の発展として追跡した。
 - ・ 解釈主義的研究の目的とは、意味を構成する際の権力と倫理の働きを理解することである。またこのような意味の構成における権力関係を、社会的・歴史的に考察する背景には構造主義の影響がある。ただし、解釈主義者は特定の問題の社会的構築のプロセスに関心を寄せる一方で、ポスト構造主義が重視するような、特定問題の社会的な構築の背後に存在する論理や排除の解体を志向しない¹。
 - 上記の議論を踏まえると PS&IR における解釈主義的研究とは、一連の手法(methods)というよりも、一貫した方法論(methodology)を持つアプローチと考えるのが妥当である。
 - ・ ここでいう方法論とは、研究課題の概念設定に応じた手法の選択とその適用の論理を意味する。すなわち、実証主義的アプローチと解釈主義的アプローチは、存在論的・認識論的に対立するため、方法を恣意的に混合することはできない

¹構造主義及びポスト構造主義は、クロード・レヴィ=ストロース、ジャック・ラカン、ルイ・アルチュセール、ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズ等の思想と関連して、1950年代以降の様々な学問分野において影響力を有した思想潮流を指す。構造主義を批判的に継承したポスト構造主義は、解釈主義的研究と同様に、人々が言説を通じてどのように周囲の状況を解釈しているかに着目する(野村 2017: 23)。2000年代以降の政治学では、上述した言説の役割や解釈を重視するアプローチが増加しており、近い関心を持つ思想的立場として構築主義、構成主義などがある。

(Yanow 2003)。

- ◇ 実証主義と解釈主義のプラグマティックな相補性を求めると、方法論的多元主義を隠れ蓑にして解釈主義的研究を実証主義的な研究モデルに従属させることになりかねないという、混合研究法や分析的折衷主義に対する疑問が一部の解釈主義者によって提示されている (Sil & Katzenstein 2010)。
- 上記した方法論的な一貫性という点は、特定の対象にのみ適用できる手法として解釈主義的研究を位置付けることを意味しない。むしろ、実証主義的研究プロジェクトや解釈主義的研究プロジェクトといった研究目的ごとに異なる理解や使い方ができる場合がある。
 - 例えば、データ収集(data collection)とデータ生成(data generation)という考え方は、経験に対する両者の理解を反映するものであり、両者の区分を考える上で有用である。実証主義的研究におけるデータ収集とは、観察者から独立した情報(observer-independent information)を前提として、事前のリサーチデザインに従って収集される。ここでは、事前に変数や仮説的な因果関係の連鎖を構築し、それらを検証することが必要となる。解釈主義的データ生成とは、データは見つけるものではなく、研究者や対象との出会いの結果として、具体的な場で作られる。データ生成では、フィールドワーク等を通じた研究の過程で結晶化されるものが反映される。
 - 二つのデータは文脈に依存するものであり、両者には数字が含まれることがある。その際、実証と解釈というある種の二項対立が崩れ始める。
 - ◇ Wedeen(2010) はエスノグラフィーを、「情報のため」にデータ収集を行う実証主義的研究と、「意味のため」にデータ生成を行う解釈主義的研究の両方に適用できることを示している。
 - ◇ Bevir (2014) は、政治的行動を解釈的に捉えるために物語形式による説明を発展させ、「説明」のアプローチと「理解」を目指すアプローチの分業が誤った解釈であることを示している。
- 実証・解釈的研究における理論の位置付けについて
 - 実証主義的研究は、研究において検証・構築される理論を、社会-政治的世界の複製(replication)として扱う。
 - この一方で、解釈主義的研究は理論と経験、抽象と具体との間を行き来しながら

議論を展開する。つまり、解釈主義者は直接的な意味で理論を検証することはなく、理論的枠組みと経験との間の再帰的かつ反復的な往復によって理論的議論に到達する。解釈主義者は、こうした理論と経験が互いに影響し合うプロセスを明確にしようとする。

➤ 解釈主義的研究の構成要素 (1215-1219 頁)

解釈主義的研究の目的は、文脈的に位置づけられた社会的行為者による意味形成の実践を理解することにある (Schwartz-Shea & Yanow 2012)。解釈主義的研究が核とする前提(core premises)は、意味の多義性、特定の文脈における概念の分析的使用、帰納的探求の論理、再帰性である。以下では上述した解釈主義的研究の前提を順次検討する。

● 意味の多義性

- ・ 解釈主義者は意味に着目する。なぜなら意味とは行動の構成要素であり、政治的行動を説明するには、意味を理解することが必要だと考えるからである (Bevir & Rhodes 2006)。
- ・ 解釈主義者は、ある選択をする際に人々は自分の置かれている状況をどのように意味づけているのか、また社会正義は日常生活で経験される文脈においてどのように理解され、他の政治的思想とどのように結びついているのか等に注目する。
 - ◇ 解釈主義者は、有権者の政党選択を社会正義に対する態度と関連させたり、有権者のアイデンティティと党派性の関連を仮説化し構造化インタビューによってその仮説を検証・説明する研究は行わない。
 - ◇ 解釈主義とポスト構造主義との大きな違いは、政治的主体の位置付けをめぐる見解の相違にある。ポスト構造主義的研究の伝統では、主体及びその行動や意味づけとは、言説によって生み出されるとみなす。従って、主体の強い自律性の概念(strong notion of autonomy)を否定する。国際関係論における言説分析はこうした立場を採用する傾向がある (Milliken 1999; Hansen 2007; Epstein 2008; Howarth & Griggs 2012)。
 - ◇ この一方で解釈主義的研究の伝統では、理論や価値(ideology)を媒介とした、各主体の文脈的な構築と世界における相互作用を重視する。言い換えると、ポスト構造主義における構造によって規定された主体という前提に対し、解釈主義は、構造によって構築された主体と、主体による言説を通じた構造的可変性とを同時に想定する (Bevir & Rhodes 2006)。

- ✓ Bevir & Rhodes(2006)は、政治学における解釈主義的研究のアプローチとして、「状況的エージェンシー (situated agency)」という概念を提案している。
- 概念の位置付け
 - ・ 解釈主義者は、事前に概念を特定するのではなく、フィールドにおいて重要な概念を学ぶ。これはテキストを扱う研究者にもあてはまり、概念がどのように使用され、位置づけられるかを分析することで、意味を学んでいく。
 - ◇ Zirakzadeh (2009) は、バスクの民族解放組織である ETA (Euskadi Ta Askatasuna: バスク祖国と自由) についてのフィールドワークが進むにつれて、調査の分析枠組みとして想定していた「近代化」という概念では、現地の地域政治の展開を捉えることができないと感じた。バスクにおける地域政治の展開は、前近代的な社会から近代的な社会への変容と関連しているのではなく、ストリートレベルでの出来事や小規模な地域組織が関与していることを発見した (Zirakzadeh 2009: 106)。Zirakzadeh は、地域政治の異質性を象徴する地元の「asociaciones de vecinos」(自治会) との予期せぬ出会いを契機に、政治的行為者の認識や選択を捉えるために、現地で活用されている概念を中心に調査を再設計した。
 - ◇ このような研究のプロセスは、質的実証主義研究や量的実証主義研究においてケースを事前に設定する／ケース選択を行うのとは対照的に、フィールドでの状況に対応する「ケーシング」というアプローチを反映している (Soss 2018: 26)
- 帰納的探求の論理
 - ・ 解釈主義者は意味の探究においてアブダクションという論理を用いる。アブダクションとは、研究の実践において理論を検証するのではなく、理論的枠組みと、社会政治的・制度的状況を含む研究者の生きた経験の間とを、継続的に反復するという推論の様式である。
- 再帰性(Reflexivity)
 - ・ 解釈主義者は、上述したような生きた経験・現実をより理解する方法として、再帰性を想定している。再帰性とは、研究課題における研究者の役割を明らかにし、

知識の生産がそうした研究者の関与によっていかに特徴づけられるかを明らかにするものである。すなわち、「研究プロセスのあらゆる段階における自己の役割について鋭敏に認識し、理論化すること」(Schwartz-Shea 2006: 102)が含まれる。

◇ Shehata (2006)は、エジプト・アレクサンドリアでの工場労働者について分析するなかで、研究者のアイデンティティが包摂と排除のダイナミクスをいかに同時に生み出すかを示している。Shehata は男性であることと、ムスリムであると認識されることが、エジプトにおける工場調査の参入を可能にする一方で、特にキリスト教徒のエジプト人や女性への研究上のアクセスを遮断することを示している。このように知識生産空間における自分の立場を、研究実践における制約とともに明らかにすることは、研究の信頼性を高めるのに役立つ。

➤ 解釈的研究の実践例(1219-1225 頁)

本節では解釈主義的な研究戦略のいくつかの例について説明し、解釈主義的研究の多様性を示したい。

- フィールドワークに基づく解釈主義的研究
 - ・ 以下では、ルワンダの大量虐殺を研究テーマとしフィールドワークをおこなった Lee Ann Fujii の研究に着目し、暴力の意味を理解しようとした過程で結晶化した三つの方法論的貢献をとりあげる。
 - ・ 第一に、研究において対象とともにデータを共同生成するリレーショナル・インタビュー・アプローチである。リレーショナル・インタビューとは、参加者間の双方向の対話が、特定の状況、興味、信念、背景によって形作られると想定する。Fujii(2018)はデータの価値とは、事実の正確さではなく、話し手自身の世界や話し手がどのように経験、伝達、理解しているかについて、話し手自身が伝える行為自体に存在することを主張した。
 - ・ 第二に、Fujii (2010) は、自身が「メタデータ」と呼ぶものの分析的価値を指摘している。メタデータとは、研究の参加者がインタビューの中で必ずしも明言しないが、他の方法で示される思考や感情を意味する。Fujii(2010)はこのようなデータとして、噂、創作、否定、言い逃れ、沈黙の5つのタイプを挙げ、これらはコミュニティを維持する規範を示すものとしてデータ生成・分析のプロセスに不可欠の要素であると述べている。

- ・ 第三に、Fujii(2015)は政治学における「偶発的エスノグラフィー(accidental ethnography)」の概念を導入している。偶発的エスノグラフィーとは、研究計画の予定を超えて生じる事象に体系的な注意を払うことを意味する。このような予定外の瞬間は、より大きな政治・社会的世界を指し示しており、研究者と被調査者の双方が埋め込まれている文脈を理解する助けとなる。
- 解釈主義的政策分析の事例
 - ・ 政策分析における解釈主義的アプローチでは、政策形成を「問題の定義や概念枠組み、問題に対する人々の理解、政策対応の動機となる共有された意味、評価基準等に関わる、言説的闘争」として描写する必要性を指摘する (Fischer & Gottweis 2012: 7)。とりわけ、政治的課題を所与のものとはみなすのではなく、ある問題が問題化される過程、すなわち政治的に対処可能な問題として言説的に構築される過程に焦点を当てる。以下では、解釈的政策研究の分析の中核となる「問題化」について紹介する。
 - ・ 解釈主義において問題化とは、フーコー的なポスト構造主義の伝統に見られるように、政治的課題に関する特定の思考様式を自明かつ事実として現出させる、大きな権力／知識体制 (regime) の産物として位置付けられる。解釈主義的研究が注力するのは、問題提起・構成へと帰結した歴史的過程を再構築することにある (フーコーが系譜学と呼ぶ手法)。
 - ◇ 例えば問題化の過程に着目する研究では、言説を構成する以下の要素に焦点化することで、問題定義をめぐる行為者の言説闘争の分析を発展させている。具体的には、「フレーム」、「ナラティブ」、「メタファー」、「神話」、「カテゴリ」の役割に着目する研究である (Goffman 1974; Yanow 1992; Hajer 1997; Stone 2002)。
- 解釈学的研究におけるアート・ベース手法 (Arts-Based Methods) の事例
 - ・ アート・ベース手法とは、言葉で客体化することが困難な「暗黙知」を探求するために、芸術的な手段を用いて研究参加者のアイデア、感情、意味づけを分析する手法を意味する。
 - ◇ Gameiro (2018)は、ウェールズの首都カーディフの黒人マイノリティー (Black and Minority Ethnic) 女性の不妊とヘルスケアの経験を探求するために、メタファー中心の描画法を開発した。ここでは感情やアイデアなどの非

言語的かつ無形のものを描画という有形のメタファーで表現することで、語られない知識を伝達可能にする方法を提供している。Gameiro とその同僚の研究によって、データを生成するだけでなく、BME 女性における不妊や医療制度の経験に関する意味の多様性を明らかにした。

- ◇ Guevara & Lopez (2019)は、コロンビアの武装集団の元メンバーの主観に着目した研究において、参加者に自分の物語、経験、考え、感情を布に縫い、刺繍してもらうというテキスタイルを用いた調査を行っている。そこでは、テキスタイル・ブックを作成し展示することで、参加者だけではなく鑑賞者との非言語的な相互作用や情報交換が行われることを示している。こうしたアートに基づく研究は、それ自体が社会の意味形成過程に介入し、平和に貢献するという可能性を有している。
- ◇ このように解釈主義的研究においては、言葉で客体化することが困難な感情、抽象的なアイデアや思考を、アートベースの手法によって認識することが探求されている。

➤ 結論(1225-1226 頁)

- PS&IR における解釈主義的手法は、世界（グローバル）から国家／社会、地域（ローカル）に至って生じている政治を、因果法則ではなく、偶発的かつ流動的な実践として捉えるとともに、そこでの人々の行為の意味を探求する (Bayard de Volo 2016: 244)。特に、そうした特定の意味がいかにして権力を生み出し、組織化するかについて関心を有している。
- 本研究では、解釈主義が一連の手法を用いるのではなく、多義的な意味の探求、特定の文脈における概念の分析的使用、帰納的な探求の論理、再帰性の 4 つの柱を基礎とする方法論であることを示した。これらの原則をどのように採用するかは、研究例が示すように個々の研究によって異なる。ここで重要な点は、解釈主義的研究におけるいずれの研究も、研究者から独立した客観的に知ることができる世界が存在するという考えを否定していることにある。

➤ 参考文献

野村康, 2017, 『社会科学の考え方 認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会。
Mark, Bevir, & R. A. W. Rhodes, "Defending Interpretation", in *European Political Science*, 5, pp.

69-83.